

カラオケの為の楽譜読解入門

志村 良知

普通の人の楽譜との出会いは、小学一年の音楽の時間だろう。そこで音楽には楽譜というものがあり、それさえあれば万国共通で音楽を再現・演奏できることを知る。音楽の時間は延々中学三年まで続くので相当高度な理論や楽曲を学ぶ。しかし、普通はそこから先、楽譜を使う機会が無いので語学同様にすっかり忘れてしまう。

カラオケには楽譜は要らない。しかし楽譜があつて、昔習った記憶を辿つてそれを参考にすることができれば、たぶん、きつと、もつと、うまくなれる。

音楽の三要素とは、メロディー、リズム、ハーモニーである。カラオケではこのうち後者二つは器械が受け持ってくれる。歌い手の基本的な責任はメロディーのみ、伴奏に合わせて外さないことである。

楽譜の最初にある分数は拍子記号で、リズムを決めている。小節の最初の音が強拍であるが、演歌ではこの第一拍目が全拍ないし半拍の休符、つまり、歌詞の各フレーズの最初が弱拍で始まることが多い。手指でのタクトが下りる時でなく上がる時に弱く声を出す。同じ高さの音符を曲線のタイ記号で繋いで音を伸ばし、強拍を消して弱拍が始まるようリズムを変えていることも多い。

曲の最初の調号を表す＃や♭は無視して良い。しかし、曲の途中で臨時に出てくる場合は作曲者の思いが入つてのことなので重要、そこは曲の聞かせ処、いわゆるサビである。

要は、入りが強拍か弱拍かと臨時の半音上げ下げ。これに注意することで、かなり譜面、即ち作詞・作曲家の意図に忠実になる。しかし、カラオケは正確であれば受けるというものではない。聴衆に受けるには、強く、弱く、速く、遅く、時にビブラート、と感情を込めないで、すなわち曲想をつけないければならない。それには伴奏や原曲をよく聞いて練習あるのみであるが、楽譜にも作曲者・編曲者からのメッセージとして曲想の指示が、記号で書かれていることがあるので参考にしよう。

あとは身振り手振りのエンタメ精神、さあマイクを握ろう。